

# 世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

— 次世代への継承に向けて —

---

田 中 完

## 序文

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は、平成17年に鹿児島県主催でシンポジウムを開催して以降、10年かけて、ようやく、平成27年7月に悲願の世界文化遺産に登録されました。

みなさん、磯の仙巖園には行かれたことはあると思いますが、関吉の疎水溝や寺山炭窯跡に行かれたことはありますか？ この機会に、是非、それぞれの遺産に足を運んでいただきたいと思います。

例えば、関吉の疎水溝であれば、田園風景と川のせせらぎにしばし佇み、取水口だけでなく、疎水溝沿いも歩いてみてください。春は桜並木、梅雨の時期はあじさい、秋は彼岸花と四季折々の風景を楽しみながら散策してみてください。そして、ここがなぜ世界遺産になったのか、先人の取組に思いを馳せてみてください。バス停も近くにありますが、道路案内標識も整備されてきておりますので、ガイドブックを片手に、是非、御家族やお友達と一緒に、磯地区のみならず、関吉の疎水溝や寺山炭窯跡にも見どころがありますので、どうぞ足を運んでみてください。

ここで、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」とはどんなものを理解していただき、日本の近代化の先駆けである鹿児島の集成館事業のすばらしさを感じ取っていただく機会になり、鹿児島の遺産、ひいては熊本や佐賀、長崎などの遺産にも関心を持っていただき、訪れる機会になれば幸いです。

まず鹿児島県が口火を切って始まった10年間にも及ぶ世界文化遺産登録までの取組経緯について説明させていただいた上で、8県11市にわたる23の遺産群全体で世界遺産価値を持つという資産の特徴や、九州・山

口の遺産のほかになぜ岩手県の橋野鉄鉱山や静岡県の韮山反射炉まで入っているのか、さらに、第11代薩摩藩主島津斉彬によって興され、日本の産業化の先駆けとなった集成館事業や、鹿児島構成資産である旧集成館と関吉の疎水溝、寺山炭窯跡とのつながりなどについても説明をさせていただきます。

## 1 世界遺産の現状について

世界遺産の件数につきましては、平成28年7月にイスタンブールで開催されたユネスコ世界遺産委員会での審議の結果、新たに21件が追加され、1,052件になりました。そのうち、文化遺産は12件増えて814件に、自然遺産は6件増えて203件になりました。（資料1）

世界遺産の件数は年々増加してきており、平成26年に1,000件を超えて1,007件となりました。近年、ユネスコ世界遺産委員会では、管理可能な規模とするために、新規登録件数を抑制する傾向にあります。

## 世界遺産の件数

**1,052件 (+21件)** (平成28年7月現在)  
※ ( ) 内の件数は、対前年比。

### ● 文化遺産 (814件)

- ・万里の長城 (中国) (+12件)
- ・ピラミッド (エジプト)
- ・ポンペイ (イタリア)
- ・法隆寺仏教建造物 (日本)



### ● 自然遺産 (203件) (+6件)

- ・グランドキャニオン (アメリカ)
- ・ガラパゴス諸島 (エクアドル)
- ・屋久島 (日本)



### ● 複合遺産 (35件)

- ・マチュピチュ (ペルー) (+3件)



資料1 世界遺産の件数

日本における世界遺産につきましては、平成28年に「国立西洋美術館」を含む7ヶ国にある17の作品からなる「ル・コルビュジェの建築作品」

## 世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

が世界文化遺産に登録され、文化遺産は16件となり、世界遺産第1号の「屋久島」を含む自然遺産の4件と合わせて20件です。(資料2)

## 文化遺産 (16件)

①法隆寺地域の仏教建造物 (奈良県:H5)

※( )書きは所在県及び世界遺産一覧表記載年

②姫路城 (兵庫県:H5)

③古都京都の文化財 (京都府・滋賀県:H6)

④白川郷、五箇山の合掌造り集落 (岐阜県・富山県:H7)

⑤原爆ドーム (広島県:H8)

⑥厳島神社 (広島県:H8)

⑦古都奈良の文化財 (奈良県:H10)

⑧日光の社寺 (栃木県:H11)

⑨琉球王国のグスク及び関連遺産群 (沖縄県:H12)

⑩紀伊山地の霊場と参詣道

(三重県・奈良県・和歌山県:H16)

⑪石見銀山とその文化的景観 (島根県:H19)

⑫平泉 (岩手県:H23)

⑬富士山-信仰の対象と芸術の源泉 (静岡県・山梨県:H25)

⑭富岡製糸場と絹産業遺産群 (群馬県:H26)

⑮明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業

(8県11市:H27)

⑯ル・コルビュジェの建築作品-近代建築運動への顕著な貢献-

(東京都(国立西洋美術館)ほか6か国:H28)

## 自然遺産 (4件)

①屋久島 (鹿児島県:H5)

②白神山地 (青森県・秋田県:H5)

③知床 (北海道:H17)

④小笠原諸島 (東京都:H23)

資料2 日本の世界遺産 (20件) (平成28年7月17日現在)

世界遺産に登録されるためには、暫定一覧表に記載される必要があり、現在、日本の暫定一覧表に記載されているものは、文化遺産9件と自然遺産1件の計10件です。(資料3)

文化遺産については、6番目にある福岡県の「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、平成28年にイコモスによる審査が行われ、その中で9月7日から5日間現地調査が実施されたところであり、平成29年の世界遺産委員会で審議される予定です。

4番目にある「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」(平成28年9月1日、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」から名称変更)は、平成29年にイコモスによる審査があり、平成30年の世界遺産委員会で審議される予定です。

また、自然遺産は「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」(平成28年11月2日、「奄美・琉球」から名称変更)のみで、平成29年2月

1日にユネスコ世界遺産センターへ推薦書を提出したところであり、これから、国際自然保護連合（IUCN）による審査を受け、平成30年の世界遺産委員会で審議され、世界遺産に登録されると、鹿児島県は1つの文化遺産と2つの自然遺産を持つ唯一の県になります。

日本の世界遺産候補（暫定一覧表記載物件）（10件）	
文化遺産（9件）	
①「武家の古都・鎌倉」	②「彦根城」
③「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」	
④「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（H28.9/1名称変更） （H28：国内推薦候補決定→H29：イコモス審査→H30：世界遺産委員会審議）	
⑤「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」	
⑥「宗像・沖ノ島と関連遺産群」 （H28：イコモス審査（現地調査9/7～11）→H29：世界遺産委員会審議）	
⑦「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」	
⑧「百舌鳥・古市古墳群」	
⑨「平泉・仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張申請中）」	
自然遺産（1件）	
「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」（H28.11/2名称変更） （H29：IUCN審査→H30：世界遺産委員会審議）	
その他、世界遺産を目指している主な物件（文化遺産）	
①「松島 一貝塚群に見る縄文の原風景」	
②「足利学校と足利氏の遺産」	
③「埼玉古墳群 一古代東アジア古墳文化の終着点一」	
④「天橋立 一日本の文化景観の原点」	
⑤「錦帯橋と岩国の町割」	
⑥「四国八十八カ所霊場と遍路道」	
⑦「阿蘇 一火山との共生とその文化的景観」 など27件	

資料3 日本の世界遺産候補

## 2 世界文化遺産登録に向けた取組について

10年にも及ぶ世界文化遺産登録に向けた取組の契機は、平成17年7月に鹿児島県主催で開催した「九州近代化産業遺産シンポジウム」です。このシンポジウムは、産業遺産分野の世界的権威で、当時、国際産業遺産保存委員会事務局長をされていたスチュアート・スミス先生（イギリス）から、「鹿児島の集成館は日本においてはすばらしい遺産だが、世界遺産を目指すとなると、これだけではなく、九州には幕末から明治にかけての日本の近代化を証言する遺産がひとつおり残っているので、これらの遺産をセットにすると世界遺産の可能性はある」というアドバイスをいただき、まずは鹿児島県がスミス先生をお呼びしてシンポジウム

を開催しました。残念ながら、スミス先生は、「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録を前にして、平成26年4月に亡くなられました。スミス先生が世界文化遺産登録に向けて長年にわたり献身的に取り組んでいただいたことに改めて心から感謝しております。

その翌年、平成18年6月の九州地方知事会議で、政策連合という各県共通の広域的な課題について連携して取り組む項目の一つに、鹿児島県が提案した「九州近代化産業遺産の保存・活用」を加えることが決定され、九州全体の取組がスタートし、九州各県に出向いて協力を呼び掛けて回りました。

暫定一覧表への追加記載案件については、従来、文化庁主導で選定されていましたが、平成18年9月には、遺産所在の都道府県及び市町村の共同提案をもとに審査を行うことになり、急遽11月に関係6県8市で文化庁へ提案を行いました。継続審議となりました。翌平成19年に関係6県11市で再提案をし、平成20年9月に文化庁が暫定一覧表への追加記載を決定しました。（平成21年1月に暫定一覧表へ追加記載されました。）

これを受けて、同年10月に鹿児島県知事を会長とする「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会を設置しました。ここから、いよいよ本格的な世界文化遺産登録に向けた7年近くに及ぶ取組が始まりました。鹿児島県は会長県で、協議会の事務局を担うため、企画課内に世界文化遺産登録推進室を立ち上げて、国や国内外の専門家、関係県市等との調整に奔走しました。

同協議会の下に国内外の専門家からなる専門家委員会（16名の委員のうち、9名は海外の委員）を設置し、推薦書作成のための助言をいただきました。（写真1）これだけ多くの海外専門家による助言を最初から受けながら取り組むのは国内では初めてのことです。このような国際的な体制であったことから、全体としては比較的順調に世界文化遺産登録を実現できたと思います。

このように体制ができたことから、世界文化遺産登録に向けて具体的な検討に入りました。そこでまずやらなければならなかったことは、どういったストーリーで、それをきちんと説明する過不足のない構成資産を選択するということでした。



写真1 国内外の専門家からなる専門家委員会による調査・検討

世界遺産は「顕著な普遍的価値」を持っているものであり、それは、世界遺産の評価基準に合致していること、真実性或完全性があること、万全の保護・管理体制があることといった3つ全ての要件を満たす必要があります。(資料4)



資料4 世界遺産に登録されるための要件

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

専門家委員会の委員の先生方には九州・山口の構成資産候補を精力的に調査していただきました。協議会事務局の本県職員は、その現地調査に同行し、国や関係県市と連絡を取りながら、円滑に調査が進むように頑張りました。昼夜を問わずの対応でしたが、現地調査の最後には、海外専門家の先生方から「よくやった」と笑顔で感謝の言葉をいただき、それがやり甲斐につながり、続けられたのではないかと思います。

このように、各地で現地調査を行い、その都度、調査結果をもとに構成資産とすべきかどうか、今後どういった調査が必要かなどについて熱心に協議していただき、協議会事務局では、その協議結果を即座に取りまとめて、国や各県市と共有し、今後の対応を協議していきました。このような現地調査と協議の繰り返して、自治体同士の結束が徐々になくなっていきました。その現地調査の結果をもとに、都合10回の専門家委員会を開催し、推薦書の前案を固めていきました。(写真2)



写真2 専門家委員会：10回開催（平成21年1月～25年4月）

その中で、平成21年10月の第4回専門家委員会で、それまでの検討結果を踏まえた提言書が取りまとめられ、その後の世界遺産シンポジウムの中で、統括委員長のニール・コソン卿から伊藤祐一郎会長に提言書が

手渡されました。(写真3)

この提言書では、稼働資産の三菱長崎造船所や官営八幡製鐵所、岩手県釜石市の橋野高炉跡も加えられ、暫定リストより6件増えて28件となり、世界遺産登録に向けて、専門家委員会からの提言書を尊重しながら調整を続け構成資産を固めていきました。



写真3 世界遺産シンポジウム（平成21年10月22日、東京）

さて、世界文化遺産登録について、国においては、従来、文化庁を窓口として進めてきましたが、本遺産群には稼働資産が含まれていることから、「遺産価値の適切な保全」と「価値の保全が経営に与える制約の最小化」との両立を図るための仕組みについて、規制緩和の取り組みの中で検討していただきました。その結果、平成24年5月には、稼働資産を含む産業遺産群の世界遺産登録に向けて推薦する場合の取扱等について閣議決定がなされ、内閣官房を事務局とする体制が確立されました。(資料5) これが世界遺産登録に向けての大きなターニングポイントになりました。



世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

<b>&lt;平成23年&gt;</b>	
3月 7日	<b>産業遺産の世界遺産登録等に係る関係省庁連絡会議の設置</b> ①稼働中の産業遺産の保護管理の在り方を検討。 ②その一環として九州・山口の地元地方公共団体等からのヒアリングやケーススタディー等を行う。
4月 8日	<b>「規制・制度改革に係る方針」の閣議決定</b> ○稼働中の産業遺産の世界遺産登録に関して、関係府省は、現行の文化財保護法に基づく保全方策以外の方策について速やかに検討を開始し、できる限り早期に結論を得る。
<b>&lt;平成24年&gt;</b>	
3月23日	<b>第3回関係省庁連絡会議(局長級)</b> ○稼働中の産業遺産を含む案件を世界遺産登録に向けた推薦を行う場合の取り扱い等について取りまとめ。
5月25日	<b>閣議決定</b> ○「稼働中の産業遺産又はこれを含む産業遺産群を世界遺産登録に向けて推薦する場合の取り扱い等について」を閣議決定→所管：内閣官房

資料5 稼働資産の取扱いに係る国の対応経過

平成25年4月には、第10回の専門家委員会で最終とりまとめがなされ、協議会で検討を重ねてきた推薦書原案をついに国へ提出しました。

その後、国における調整・検討を経て、年に1件しか推薦できませんでしたので、最終的に、平成25年9月に「明治日本の産業革命遺産」が政府推薦案件として決定されました。明けて平成26年1月末にユネスコに推薦書が提出され、ユネスコの諮問機関である「国際記念物遺跡会議(イコモス)」による審査が行われました。

その中で、9月26日から10日間、イコモスの専門家が8県11市の23の遺産全てを現地調査し、鹿児島県の集成館には9月28日(日)に来られました。まだ残暑が厳しく、少しでも快適に調査をしていただこうといういろと気を遣いました。途中、台風が来て、急遽、端島への上陸を前倒しし、スケジュールを入れ替えたこともありましたが、まさにリレーでバトンを次々渡していくような感じで、各県市が一体となってなんとかスムーズにつないでいけました。このときほど、言わば「チーム産業遺産」といったような一体感を感じたことはありませんでした。

その甲斐あって、平成27年5月のイコモスによる審査の結果では、23の構成資産全てを含めて世界遺産への登録が妥当という勧告でしたが、同年7月にドイツのボンで開催された世界遺産委員会では、国を挙げて

の取組の結果、3日間にわたる新規案件の審議の最終日によく世界文化遺産登録が決定されました。(写真4) ボンに滞在中、毎朝8時にホテルのロビーで関係者と打合せをし、審議結果に応じたスケジュールについてシミュレーションをするなど、気をもむ毎日でした。驚いたことに、登録が決定した夕方、急に天気が荒れてきて、雷が鳴ったかと思いきや、窓の外を見たところ、ピンポン玉ぐらいの「ひょう」が激しく降ってきました。そして、審議中毎日40度近くあった気温が一気に15度くらいまで下がり、急に秋になったようでした。



写真4 世界遺産委員会（ドイツ・ボン）

平成28年3月には、石破茂地方創生大臣から本県知事をはじめ関係自治体の首長に対し、ユネスコの世界遺産登録認定証（複製）が交付され、御覧のように、「『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』を世界遺産一覧表に記載した」と書かれており、平成27年7月8日に世界遺産に登録されています。（資料6）

みなさん、世界遺産に登録されて終わりだろうと思われるかもしれませんが、世界遺産委員会の決議において8つの宿題が示されました。（資料7）構成資産ごとの保全措置の計画策定や、人材育成計画の策定、資産の説明戦略の策定などの進捗状況について平成29年12月1日までにユネスコに報告することになっており、現在、国主導の下、各県市と連携してそれぞれの項目に係る作業を計画的に進めているところです。

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」



資料6 世界遺産登録認定証（複製）

## 今後の取組

### ～ユネスコからの8つの宿題～

- a) 端島炭坑の保全措置の計画を優先的に策定すること。
- b) 推薦資産及びその構成資産に関する保全措置の計画及び実施計画の策定
- c) 各構成資産における受け入れ可能な来訪者の上限数の設定
- d) 推薦資産及び管理保全のための新たな枠組みの有効性についてのモニタリングの実施
- e) 管理保全計画及び地区別保全協議会での協議事項・決議事項の実施状況についてのモニタリングの実施
- f) 人材育成計画の策定、実施
- g) 推薦資産のプレゼンテーションについての説明戦略の策定
- h) 集成館及び三重津海軍所跡における道路建設計画、三池港における新たな係留施設に関するあらゆる開発計画及び来訪者施設の増設・新設に関する提案について、審議のため世界遺産委員会に提出すること。

資料7 世界遺産委員会の決議で示された勧告

### 3 「明治日本の産業革命遺産」の概要と特徴について

「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産の価値は、18世紀半ばにヨーロッパのイギリスを中心に始まった産業革命が、19世紀末から20世紀初頭にかけてアジア地域に伝播し、そこで初めて産業革命を成し遂げる、といった世界レベルのダイナミックな技術伝播を証明しているという点にあります。対象とする年代は、幕末の1850年代から明治時代後半の1910年までの約60年間で、取り扱う分野は重工業、中でも製鉄・製鋼、造船、石炭産業の3分野です。なお、平成26年に世界遺産に登録された富岡製糸場は軽工業分野の遺産です。

最も大きな特徴は、八幡製鐵所や三菱長崎造船所などの現在も稼働している工場群が遺産の中に含まれていることで、国内では初めてであり、また、これほどまでに現役で稼働している工場群が世界遺産に登録されたのは世界でも初めてのことです。(資料8)

1 日本が、在来の伝統文化と西洋の技術を融合させながら、非西洋地域で他に先駆けて産業国家となったプロセスを証言する産業遺産群によって構成されています。

- 対象とする年代は1850年代～1910年  
(幕末～明治時代後半)
- 重工業分野の産業遺産  
(製鉄・製鋼、造船、石炭産業)
- 稼働資産が含まれています。  
(国内で初めて)

稼働資産一覧表

No	所在地	構成資産名
1	長崎市	三菱長崎造船所 第三船渠
2		〃 ジャイアント・カンチレバークレーン
3		〃 旧木型場
4		〃 占勝閣
5	北九州市	官営八幡製鐵所
6	中間市	遠賀川水源ポンプ室
7	大牟田市	三池炭鉱・三池港(三池港)
8	釜石市	橋野鉄鉱山



資料8 「明治日本の産業革命遺産」の概要①

もう一つの特徴は、専門用語でシリアル・ノミネーションと言いますが、これは、共通のテーマのもと関連のある遺産群をまとめて世界遺産に登録するという手法のことです。富士山など、日本の世界文化遺産の多くがこの手法を用いていますが、これだけ大規模で、全国に渡る遺産群をまとめて世界遺産に登録したのは初めてです。

「明治日本の産業革命遺産」は23の構成資産からなっていますが、これら全体で世界遺産の価値を有します。（資料9）

世界遺産登録に向けて、初めのうちは九州・山口から取り組んでいましたが、検討を重ね、専門家の方々の助言を受けて、鉄の技術史の観点から、九州・山口に特化せずに、岩手県釜石市の橋野鉄鉱山や静岡県伊豆の国市の韮山反射炉まで含めることになりました。（写真5）

#### 《橋野鉄鉱山》

盛岡藩士の大島高任の指導により、日本で初めて鉄製大砲のための連続出銃に成功しました。これは、水戸の那珂湊反射炉建設に、大島高任が集成館の反射炉建設に関わった竹下清右衛門とともに参加し、集成館の反射炉や洋式高炉の技術が、釜石に伝播していったことによるものです。

大島高任の長男の大島道太郎は、八幡製鐵所の技監に任命され、ドイツの最新技術で設計し、大規模製鉄所の建設に尽力しました。

さらに、新日鐵住金釜石製鐵所の前身にあたる釜石鉱山田中製鐵所では、通算49回目の挑戦で、1886年（明治19年）に日本で最初に高炉による製鉄を軌道に乗せました。その後、同製鐵所の熟練工7名が釜石から派遣され、1901年（明治34年）に設立された官営八幡製鐵所の操業に尽くし、釜石鉱山の製鉄技術が人材・技術面で活かされました。

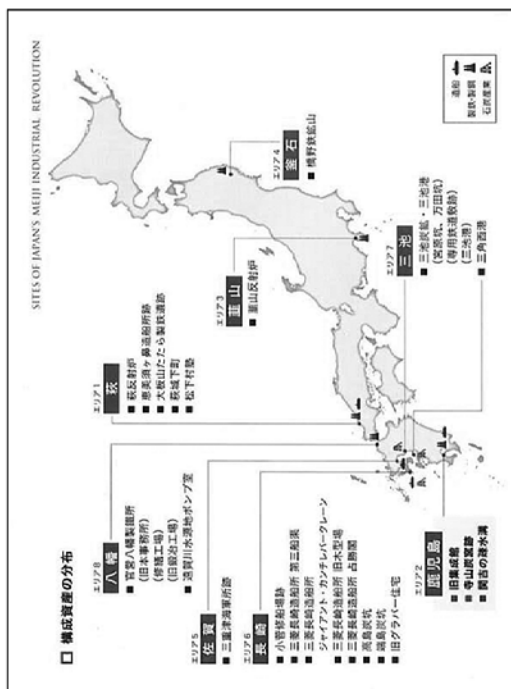
#### 《韮山反射炉》

また、国内で唯一現存する韮山反射炉については、長崎で西洋砲術を学んだ高島秋帆から砲術伝授された韮山代官の江川太郎左衛門英龍のもとに、佐賀藩の藩士が派遣され、砲台築造と大砲鑄造を学んだり、韮山反射炉の建設に当たっては佐賀藩士が支援してようやく完成したりしました。

このように、鉄の技術史上、橋野鉄鉱山や韮山反射炉は欠かせないものということで、専門家委員会での検討の結果、九州・山口に特化せず、含めることになりました。

## 2 シリアル・ミニションでの登録

- 構成資産は、8県11市に分布しています。
- 製鉄・製鋼、造船、石炭産業に関連する23の遺産群全体で世界遺産の価値を有します。



エリア	サイト	構成資産
1 萩	萩の産業化初期 の遺産群	萩反射戸 恵美須ヶ鼻造船所跡 大板山たたら製鉄遺跡 萩城下町 松平村墓 旧集成館 吉山炭窯跡 関吉の蓮水溝 荊山反射戸 橘野縁鉱山 三重津海軍所跡 小菅修船等跡 三笠長崎造船所 第三船渠 同 ジャパン・カンパニークレーン 同 旧木型場 同 占鰲閣 高島炭坑 雄島炭坑 旧クラバー住宅 三池炭鉱、三池港 三角西港 官営八幡製鐵所 官営川原池ポンプ室
2 鹿児島	集成館	
3 重山	荊山反射戸	
4 釜石	橘野縁鉱山	
5 佐賀	三重津海軍所跡	
6 真崎	長崎造船所	
7 三池	高島炭鉱	
8 八幡	旧クラバー住宅 三池炭鉱、三池港 三角西港 官営八幡製鐵所	

資料9 「明治日本の産業革命遺産」の概要②

## なぜ、岩手県や静岡県の遺産まで含めることになったのか？

### ○橋野鉄鉱山(岩手県釜石市)

- ・薩摩藩や八幡製鐵所との技術史上の関連性
- ・鉄鉱石採掘から製鉄までの過程が完全な形で現存



### ○韮山反射炉(静岡県伊豆の国市)

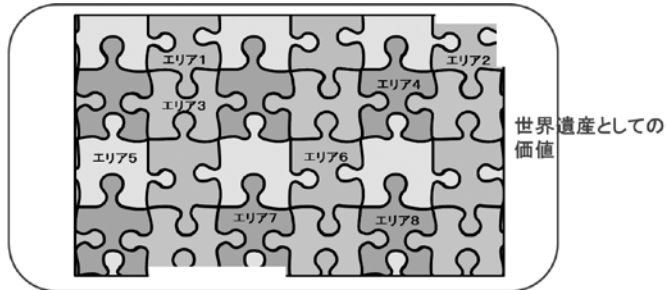
- ・佐賀藩による技術的支援
- ・反射炉が完全な形で現存(国内で唯一)



写真5 橋野鉄鉱山と韮山反射炉の位置づけ

「明治日本の産業革命遺産」は九州を中心に全国に渡る23の構成資産全体で1つの世界遺産価値を持つということをわかりやすく説明しますと、構成資産は全体の価値を構成する（全体の価値に貢献する）パズルのピースのようなものです。したがって、1つ1つの構成資産が世界遺産の価値を有するわけではありませんし、それぞれが1つでも欠けると世界遺産としての価値をなさない重要なピースです。（資料10）

例えて言いますと、23の遺産が集まってはじめて、世界文化遺産「姫路城」と対等の価値が生まれるということになります。鹿児島の集成館は全体の23分の1なので、「姫路城」の「石垣」や「窓」など、全体を構成する重要なパーツの一つであるという捉え方になります。すなわち、厳密に言いますと、世界文化遺産「旧集成館」と言うのは間違いで、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の「旧集成館」と言うのが正しい言い方です。（資料11）



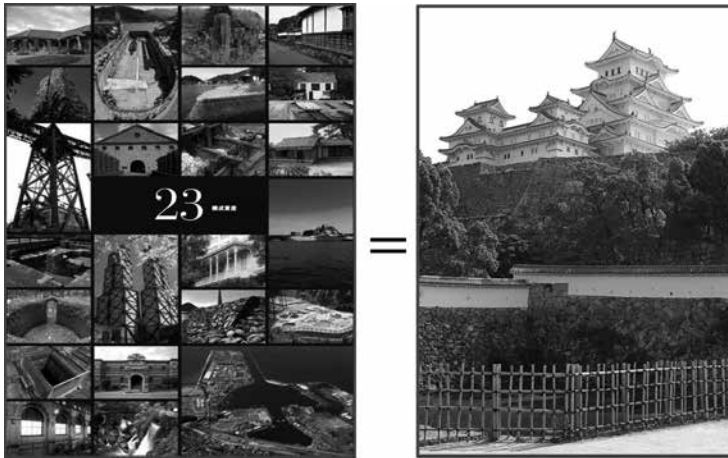
○「明治日本の産業革命遺産」は、23の構成資産全体で1つの世界遺産価値を持っています。

○構成資産は全体の価値を構成する(全体の価値に貢献する)パズルのピースのようなものです。

○したがって、1つ1つの構成資産が世界遺産の価値を有するわけではありません。

○しかし、それぞれが1つでも欠けると世界遺産としての価値をなさない重要なピースです。

資料10 パズルによる世界遺産価値の説明



明治日本の産業革命遺産

姫路城

- ・ 各構成資産は世界遺産の価値を構成する要素の1つ
- ・ 厳密には、世界遺産「旧集成館」は誤りで、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の「旧集成館」が正しい。

資料11 シリアルプロパティ（関連性のある遺産群）による世界遺産（姫路城との比較）



もう少し詳しく「明治日本の産業革命遺産」の中身を見ていきます。資料12は、23それぞれの構成資産がどの時代の、どの分野を表しているのか、ということを簡単に示した図です。横軸の発展段階に応じて、3つの時期に分けており、それぞれ取組の内容や特徴が異なっています。鹿児島の構成資産は、製鉄・製鋼の第1段階と、造船の第1段階から第2段階を表しています。

第1段階は、「試行錯誤の挑戦」としまして、当時唯一西洋に開かれた窓であった長崎を通じてオランダの技術書を入手し、そこに描かれている図面だけを頼りに、日本の伝統技術で試行錯誤しながら近代化に取り組んだ段階です。

第2段階は、「西洋の科学技術の導入」としまして、鎖国が解け、海外から機械を直接輸入し、外国人技術者の指導を受けつつ、第1段階で培った技術をもとに、日本人技術者が知識を貪欲に吸収しつつ、近代化を進めた段階です。

第3段階は、「産業基盤の確立」としまして、海外の機械を導入しつつも、知識を取得した日本人技術者が、それらを日本の環境や条件に応じて改良しながら、国際的な水準に達した段階です。

段階を追って、各産業分野ごとに、遺産の概要を見ていきますが、まず、産業化前夜としまして、萩城下町と松下村塾があります。(写真6)

萩城下町は、日本の近代化を進めた近世の封建社会の特徴を表す日本の城下町で、当時の町割りがほとんど変わらず残っています。

また、松下村塾は、産業革命の担い手となる維新の志士を育成したところであり、吉田松陰が提唱した工学教育論は、工学の教育施設を設立し、在来の技術者を総動員して自力で産業の近代化を実現しようとするというもので、その教えを受け継いだ、伊藤博文らの塾生たち(2年10ヶ月間、92名)の多くが、のちの日本の近代化の過程で重要な役割を担いました。

次に、製鉄・製鋼における試行錯誤の挑戦です。

高炉で得られた鉄をもとに、大砲を製造する施設が、ここに示されている反射炉で、長州藩の萩反射炉、薩摩藩の旧集成館の反射炉跡、幕府の韭山反射炉が含まれています。(写真7)

「明治日本の産業革命遺産」とは  
—3つの発展段階—

**・第1段階 ～試行錯誤の挑戦～**  
(1850～1860年代前半)

各藩が西洋の技術書や事例の模倣により得た知識と伝統的な在来技術を組み合わせ、試行錯誤を繰り返し産業化を進めました。  
(蒸気機関の導入以前)

**・第2段階 ～西洋の科学技術の導入～**  
(明治時代～1890年)

西洋技術及びそれを実践するため  
の専門知識を直接的に導入しました。  
(蒸気機関の導入)

**・第3段階 ～産業基盤の確立～**  
(1890～1910年)

国内に専門知識が導入され、さらに  
積極的に西洋技術を導入・改良し、産  
業化を達成しました。  
(電化のはじまり)

3つの産業分野の時系列に沿った発展 (1850年代～1910年)

1850年代～1910年における  
重工業分野 (鉄鋼、船舶、造船、化学産業) における産業化の歩み

時代	試行錯誤の挑戦	西洋の科学技術の導入	産業基盤の確立
1850年代	鹿児島 田舎成屋 香島 鹿児島海軍造船所	鹿児島 香島 鹿児島海軍造船所	八幡 宮田八幡海軍造船所 瀬田川外洋海軍造船所
1860年代	釜石 尾山成利伊 釜石 尾山成利伊	釜石 尾山成利伊 釜石 尾山成利伊	
1870年代	秋田 秋田 秋田 秋田	秋田 秋田 秋田 秋田	
1880年代	鹿児島 鹿児島 鹿児島 鹿児島	鹿児島 鹿児島 鹿児島 鹿児島	長崎 長崎 長崎 長崎
1890年代	佐賀 佐賀 佐賀 佐賀	佐賀 佐賀 佐賀 佐賀	三池 三池 三池 三池
1900年代			
1910年代			

資料12 「明治日本の産業革命遺産」とは

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」



写真6 産業化前夜

(萩城下町：日本の近代化を進めた近世の封建社会の特徴を表す日本の城下町（上）、松山村塾：産業革命の担い手となる維新の志士を育成（下））



萩反射炉



旧集成館(反射炉)



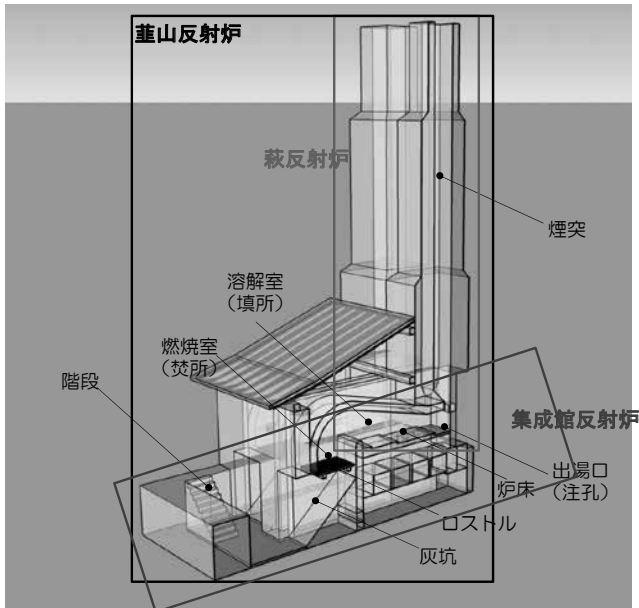
釜山反射炉

鉄製大砲鑄造への挑戦

写真7 製鉄・製鋼一試行錯誤の挑戦

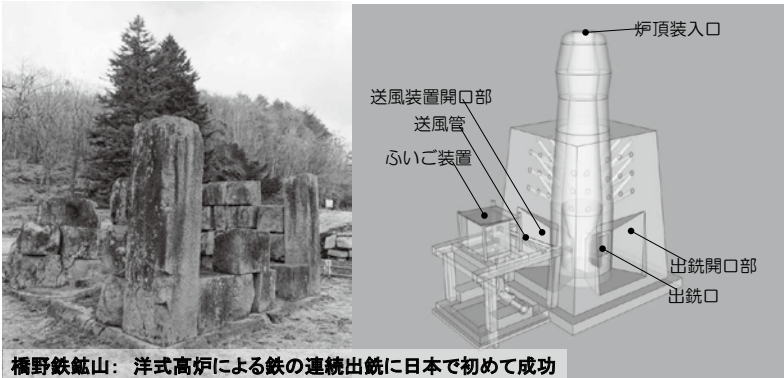
ここで反射炉の構造について説明します。(資料13)

高炉で得られた素材となる鉄を炉床に置き、燃烧室に燃料となる木炭を置きます。木炭による火力がこの天井部分に反射し、素材の鉄に熱が集中することによって、鉄が溶け出します。「反射炉」という名前の由来はここに 있습니다。溶け出した鉄を、炉の出口、出湯口から鑄型に流し込み、大砲の砲身ができます。反射炉の場合、高い煙突により上昇気流が起こり、燃烧室に空気が流入する仕組みになっているので、送風装置はありません。



資料13 反射炉の構造

ここにお示ししている橋野鉄鉱山は、釜石市に残されている製鉄施設で、鉄鉱石と木炭から鉄を作り出した高炉です。(資料14) この高炉で作った鉄が大砲の素材になります。この高炉を日本で最初に建設したのは薩摩藩の島津斉彬ですが、残念ながら残っておりませんので、ここにお示した橋野鉄鉱山を構成資産に含めることになりました。



資料14 構成資産に追加された橋野鉄鉱山と高炉の構造

次は製鉄・鉄鉱における明治末期の産業化の達成段階です。この段階では、外国の機械を導入しつつも、第2段階で経験や知識を身につけた日本人技術者の手によって近代化がなされたのが大きな特徴です。

製鉄分野では、日本初の鉄鋼一貫製鉄所として、官営八幡製鐵所が建設されました。（写真8）建設に当たっては、当時世界の製鉄先進国の一つであったドイツの設備が導入されましたが、これらの設備に改良を加え、操業を軌道に乗せたのは、釜石で経験を積んだ日本人技術者でした。



写真8 製鉄・製鋼一産業基盤の確立—（官営八幡製鐵所）  
（上：旧日本事務所 下：遠賀川水源ポンプ室）

次に、造船分野ですが、試行錯誤の挑戦としましては、西洋の蒸気船に対応するため、各地で洋式船が建造されました。

佐賀藩の三重津海軍所では国産初の実用蒸気船が、萩藩の恵美須ヶ鼻造船所では洋式帆船が建造されました。萩藩の洋式帆船に使用された碇や釘などの鉄の素材は、日本の伝統的な「たたら製鉄」で得られた鉄を使用しており、その施設も構成資産に含まれています。(写真9)



写真9 造船―試行錯誤の挑戦

薩摩藩においても、全国に先駆けて蒸気船や洋式艦船の建造が試みられましたが、残念ながら磯や垂水の造船所は場所の特定ができていませんし、桜島にあった造船所は大正時代の桜島の爆発で溶岩の下に埋もれてしまうなどして残っておりませんので、構成資産には含めていません。

造船における西洋の科学技術の導入の段階になると、西洋から直接機械を輸入し、外国の技術者の指導の下、日本人技術者が技術や知識を習得していきます。外国の機械を使用するため、日本式の造船所とは違い、御覧のように、見た目も西洋風の施設になっています。(写真10)





写真10 造船—西洋の科学技術の導入—

(左：小菅修船場跡、右：旧集成館（機械工場）)

開国され蒸気船の導入が本格化してくると、船のメンテナンスのための修理施設が必要になってきます。それが長崎の小菅修船場です。これはトーマス・グラバーと薩摩藩の小松帯刀・五代友厚が協力して作った施設です。

造船における産業基盤の確立の段階については、明治末期には、長崎造船所はアジアでも最大規模の民間造船所に発展し、御覧のとおり、明治時代に建造された施設が、100年以上経った今でも、現役で稼働し続けています。(写真11)

(三菱長崎造船所の構成資産の建造時期)

- ジャイアント・カンチレバークレーン： 1909年
- 旧木型場： 1898年
- 占勝閣： 1904年
- 第三船渠： 1905年

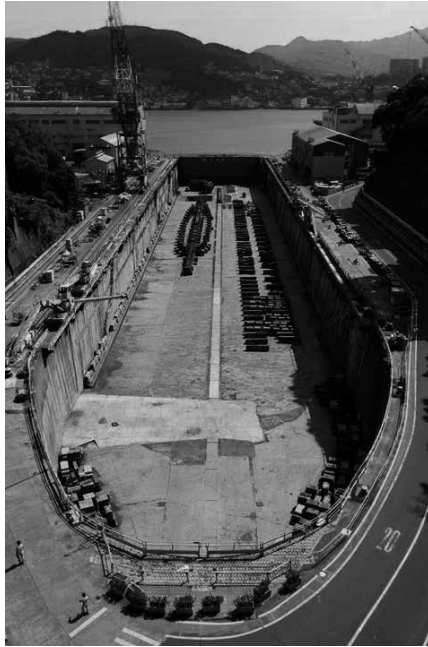


写真11 第三船渠（ドライドック）

石炭産業の近代化は、第2段階の西洋の科学技術の導入から始まります。

当時、石炭を採掘するには、地下の湧水が大きな障害になっていました。長崎の高島炭坑では、グラバーと佐賀藩によって、日本で初めて蒸気機関を使って地下水を汲み上げ、採炭効率が大きく上がり、その技術は三池炭鉱に伝わりました。三池港が開港するまでの一時期の三池の石炭積出港として、オランダの技術者（ローエンホルスト・ムルドル）の指導の下、大浦天主堂の棟梁でもあった小山秀率いる天草の石工集団によって三角西港は造られました。（写真12）





写真12 石炭産業—西洋の科学技術の導入—

最後が、石炭産業における産業基盤の確立の段階です。

三池炭鉱では、イギリスから当時最先端のポンプを輸入し、大規模で機械化された、世界でも最先端の技術で石炭の採掘が行われました。

右の写真（写真13）の三池港は、先ほどご紹介した三角西港からわずか20年後に建設された港で、外国で学んだ三井財閥の総帥、団琢磨によって建設されました。こちらも、1908年に完成してから110年近く経った今でも現役で使用されており、国の重要港湾として物流を支えています。

写真13は、皆様御存知の端島炭坑、通称、軍艦島です。明治時代当時の護岸や坑口などの生産施設の痕跡が残されています。世界遺産としての価値はこの部分にあり、軍艦のような外観を特徴付けるコンクリート建造物は、大正から昭和にかけて建設されたもので、世界遺産としての価値を直接的に表すものではありませんが、生産施設と一体となって端島を形成しています。

以上、産業分野ごとに各発展段階の構成資産を紹介してきました。詳しくはホームページを御覧ください。遺産の概要のほかに、関連のイベント情報なども御覧になれます。（写真14）



写真13 石炭産業—産業基盤の確立—  
(端島炭坑：全ての機能を集約した洋上炭坑(左)、三池炭鉱・三池港：完成された産業景観(右))

詳しくはホームページを御覧ください。

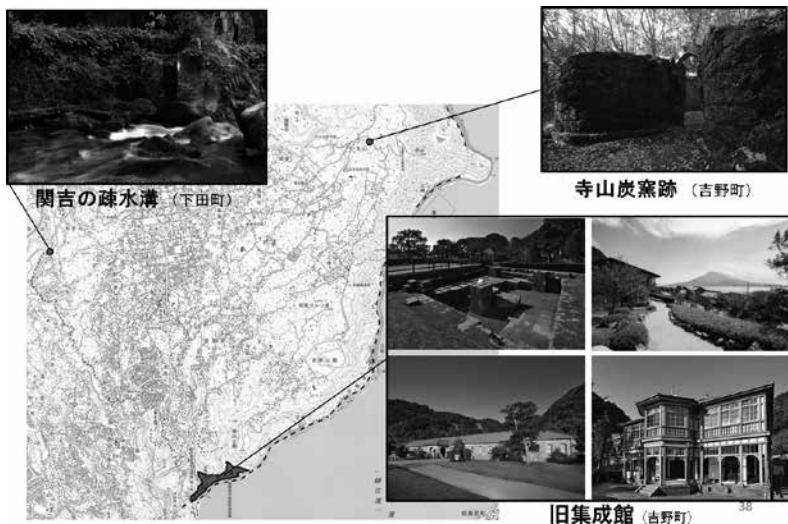
<http://www.japansmeijiindustrialrevolution.com/index.html>



写真14 「明治日本の産業革命遺産」のホームページ

#### 4 鹿児島県の構成資産とその価値について

「明治日本の産業革命遺産」における鹿児島県の構成資産は3つあります。まず皆様御存知の磯にある旧集成館、吉野台地の北東部にある「寺山炭窯跡」、そして吉野台地の西方にある下田町の「関吉の疎水溝」です。(資料15)



資料15 鹿児島県の構成資産

なお、「旧集成館」には、反射炉や機械工場（現・尚古集成館本館）、旧鹿児島紡績所技師館（異人館）、仙巖園が含まれていますが、世界遺産では地理的につながっている資産は一つと数えますので、集成館事業が行われた土地全体をまとめて取り扱っています。

それぞれの構成資産の説明に入る前に、まず、集成館事業が行われた歴史的背景から見ていきます。

19世紀に入ると、欧米列強が自由貿易の拡大のため、アジアに進出するようになり、日本の海域にも外国船が現れるようになりました。1840年から1842年にかけて起こったアヘン戦争において、当時アジア最強とされていた中国の清が、イギリスに敗北し、それを契機にイギリスやフランスの艦船が琉球に相次いで来航し、通商を求めてきました。(資料

16) 外国船の進出は、江戸、長崎、薩摩、琉球に集中しており、江戸幕府や長崎防衛を担っていた佐賀藩、琉球口を藩領としていた薩摩藩は、外国船に直面する機会が多く、危機感を募らせていました。



資料16 幕末における欧米列強のアジアへの進出状況「図録 薩摩のモノづくり  
島津斉彬の集成館事業（尚古集成館発行）」より転載

1851年に薩摩藩の藩主になった島津斉彬も強い危機感を抱き、国を強く豊かにする必要性を感じ、大砲の鋳造や造船をはじめ、様々な産業の近代化を進めました。

一口に集成館事業と言っても、時代によって、推進した人物や事業の内容が異なり、いくつかの段階に分けることができます。


まず第一期集成館事業は島津斉彬が興したもので、外国の技術書をもとに伝統的技術を駆使し試行錯誤した段階です。旧集成館の反射炉跡がこの時期に該当する施設です。

欧米列強が押し寄せてきた幕末、斉彬は外国に負けない軍備を備え、産業を興し、国を豊かにすることにより、幕府や藩の枠にとらわれずに、日本が一つになることが大事だと考えていました。斉彬は大砲や軍艦だ

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」

けでは日本は守れない、人々が豊かに暮らせるような国にすることが、日本を守ることに繋がると考えていました。

斉彬の死後、集成館事業は一時衰退しますが、その後の薩英戦争が斉彬の集成館事業を見直し、再興する大きな契機となりました。鉄製大砲を搭載した洋式船の脅威を目の当たりにし、積極的に海外の技術を導入する必要性を痛感し、薩摩藩は、イギリスに留学生を派遣して西洋の進んだ技術や知識を積極的に吸収するとともに、西洋から優れた機械を直接購入して近代化を加速させていきました。(資料17)

時期	年代	特徴
島津斉彬による 集成館事業 (第一期集成館事業)	1851年～1858年	オランダの書物を参考に自力によって実施
<div> 1858年 島津斉彬 病死  1863年 薩英戦争  1865年 薩摩藩英国留学生派遣 </div> 		
島津久光・忠義親子による 集成館事業 (第二期集成館事業)	1865年～1877年	海外から機械や技術者を直接導入

資料17 第一期・第二期集成館事業

次に、集成館地区の範囲は、仙巖園から、反射炉跡、旧集成館機械工場（現 尚古集成館本館）、さらに国道10号線を渡って鹿児島紡績所跡、旧鹿児島紡績所技師館（異人館）に至るエリアです。(写真15)

資料18は、1857年に佐賀藩士が集成館を訪問し、当時の様子を描いた「薩州鹿児島見取絵図」です。日本初の洋式工場群であった集成館では、最盛期には1,200人もの職工が働いていたと言われており、相当活気にあふれていたと思われます。

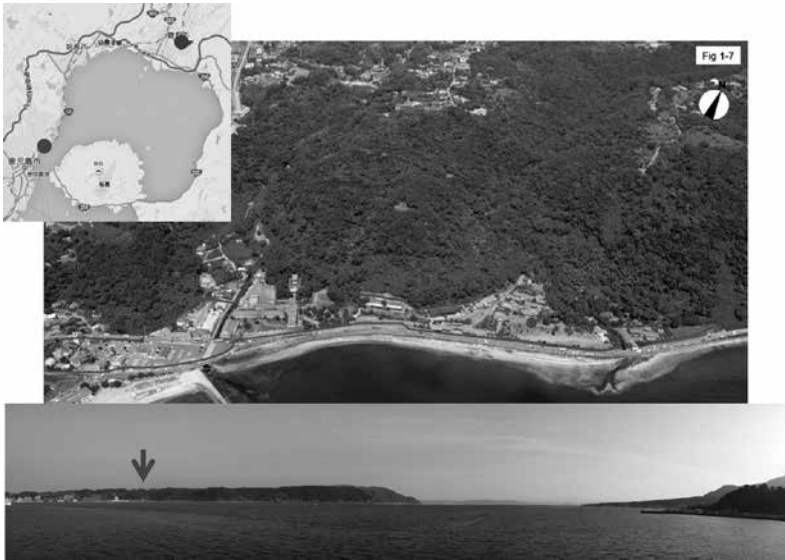
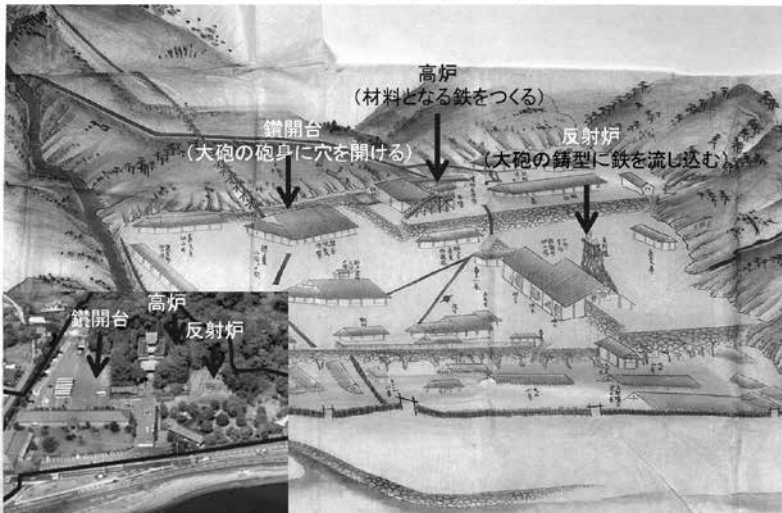


写真15 現在の集成館地区

1857年の集成館(約160年前)



資料18 『薩州鹿児島見取絵図』

(「図録 薩摩のモノづくり 島津斉彬の集成館事業 (尚古集成館発行)」より転載)

鉄製大砲を造るまでに、大きく3つの段階の工程が行われていました。まず、大量の砂鉄と木炭を交互に投入し、材料となる鉄を造る作業です。次に、高炉で得られた鉄を溶かし、大砲の鋳型に流し込み、大砲の砲身ができます。3つ目の段階は反射炉でできた大砲の砲身に穴を開け、大砲を仕上げる工程で、この施設では、この古絵図でおわかりになるように、水路が引かれていることから、動力として、高炉と同じように水車が使用されていました。

写真16は、1871年に廃藩置県が断行された直後のもので、1877年の西南戦争で甚大な被害を受ける前のものです。一番手前が鹿児島紡績所技師館で、鶴丸城跡にできた第七高等学校造士館へ移転する前のものです。このとき既に、英国人技師は帰国しており、大砲製造支配所になっていました。



写真16 第二期集成館事業 (1859～1877)

(「図録 薩摩のモノづくり 島津斉彬の集成館事業 (尚古集成館発行)」より転載)

中程に、今、コンビニエンスストアやファミレスのあるところになりますが、ここには鹿児島紡績所(1867年)がありました。平成22年の発掘調査で、その基礎部分の遺構が確認されました。当時、職工200人が

1日に10時間働き、1台の蒸気機関により、綿花から糸を作る機械27台と織機約100台を動かしていたと言われています。

左奥に斜めに伸びている建物が、集成館機械工場で、今の尚古集成館本館です。当時は、陸軍所有の大砲製造所になっていたようです。

また、右の海岸線沿いには錦江湾に向けて大砲がずらりと並んでいるのが見えます。これは、集成館が重要な軍事拠点施設になっていたことから、外敵から守るために設置されたのではないかと思います。

写真17は、現在の旧鹿児島紡績所技師館、いわゆる異人館です。独自の技術で大幅織機を製作する技術を既に持っていた薩摩藩の職工は、わずか1年間で蒸気機関を動力とする洋式紡績の技術を習得したことから、イギリス人技師（7名）は1年間しか技師館には滞在しませんでした。その後、大砲製造支配所（1872年）、西南戦争時の薩摩軍の仮病院（1877年）として使われ、1882年に鶴丸城跡地にできた県立鹿児島中学校（後の第七高等学校造士館）の本館として移転され、教官室として利用され、さらに、1936年に第七高等学校造士館の本館が完成したため、現在地に明治天皇臨幸記念館として再移転されました。



写真17 旧鹿児島紡績所技師館（異人館）



こちらは現存する日本最古の洋式工場、旧集成館機械工場です。（写真18）オランダやイギリスから輸入した機械や道具を使って蒸気機関を用いた金属加工や、艦船・蒸気機関の修理・部品加工が行われていました。反射炉建設にも携わった竹下清右衛門らが長崎製鉄所の建物や西洋の文献をもとに建設したと言われています。



写真18 旧集成館（機械工場）（現・尚古集成館 本館）

次に、白炭（しろずみ）を製造した「寺山炭窯跡」です。（写真19）

集成館事業の反射炉の燃料、高炉で鉄を作るための原料として大量の木炭が必要になり、寺山に3箇所建設されましたが、現在確認されているのはこの1箇所だけです。1858年に、島津斉彬によって建設されたことが、同時期に建てられ、現在、炭窯の前にある石碑の碑文からわかります。これは、薩摩藩士の歌人、八田知紀が詠んだもので、斉彬の先見性や炭焼事業の状況などが書かれています。同年2月に建立されており、斉彬はその年の7月に亡くなり、集成館事業が中止され、炭焼きも廃止されましたので、数ヶ月しか稼働しなかったことになります。

白炭というのは聞いたことがない方も多いかと思います。木炭には、製法上大きく分けて、黒炭（こくたん、又はくろずみ）と、白炭（はくたん、又はしろずみ）の2つあります。木を炭窯の中に入れ、蒸し焼き

にして、窯を密閉したまま火を消してできるのが黒炭、炭焼きの仕上げ段階で、窯の中に空気を入れ、ほぼ焼き上がっている炭を約1,300度の高温で燃やし、頃合いを見て、真っ赤になった炭をかま口から取り出し、灰と土を混ぜ、水分を含ませた消粉（けしこ）をかぶせてすばやく冷やしながら消してできるのが白炭です。このように水が必要でしたので、炭窯の向かい側の崖に小さな滝があり、この場所が立地条件に適していたと思われます。

一般的に、黒炭は比較的柔らかく、着火温度は低くて（火をおこしやすい）、比較的火持ちはよくありません。一方、白炭は硬く、着火温度は高くて（火をおこしにくい）、火持ちが良く、ガスも殆ど出ませんので、反射炉の燃料等に適していたのです。なお、白炭を焼く技術は中国、朝鮮半島、日本くらいにしかなく、世界中のほかの地域にある炭焼きはほとんどが黒炭のようです。



写真19 寺山炭窯跡

江戸時代当時、このような石積みの炭窯は日本各地にあったようですが、いずれも外観上から見て四角形で、イチジク型をした炭窯は薩摩藩のオリジナルかもしれません。炭を掻き出しやすくするために、このような形になったのではないかとされていますが、まだ解明されていません。（写真20）



写真20 斜め上から見た寺山炭窯跡

世界遺産登録の前に、海外の世界遺産の専門家がこの炭窯を見に来たとき「これほど大きな炭窯は見たことがない」と言われていましたので、恐らく世界にも類を見ない大きさではないかと思われます。

こちらが集成館に水を供給していた「関吉の疎水溝」の取水口で、左上の図のとおり、磯の集成館から約7キロ離れた位置にあります。（資料19）

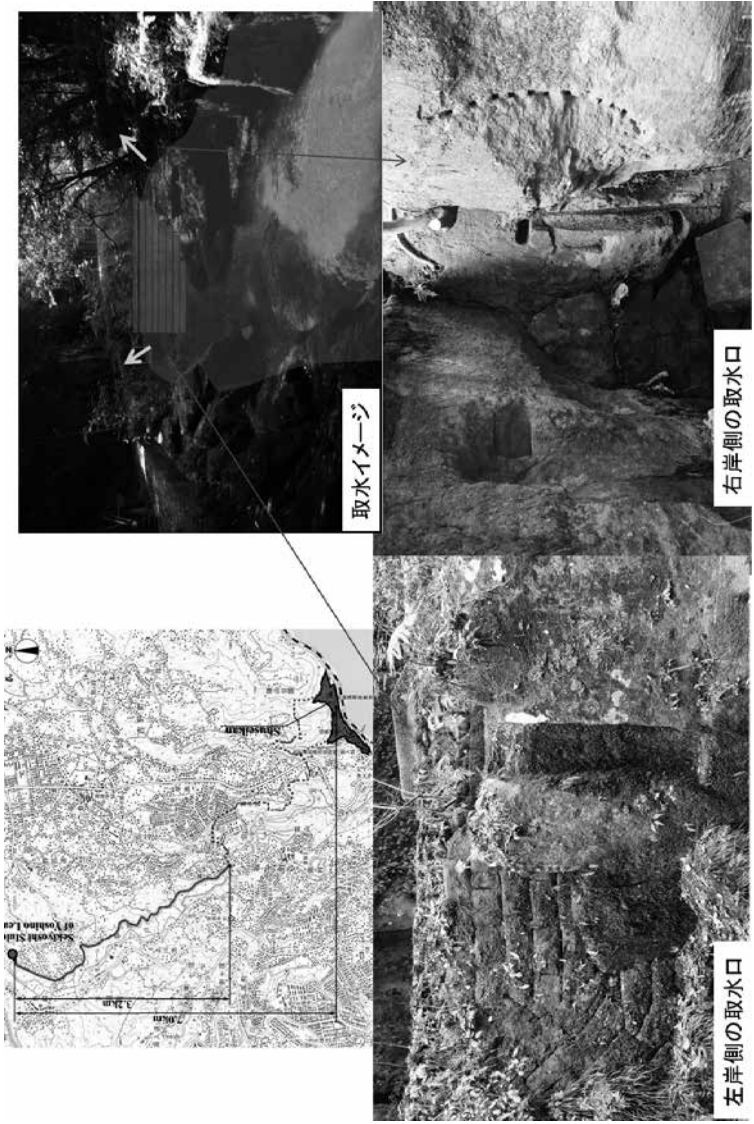
いろいろな文献を調査した結果、もともと1691年に下流の水田に水を供給する用水路が整備され、旧取水口ができ、1722年に島津吉貴が隠居後に仙巖園に常駐するようになり、仙巖園への給水を目的として疎水溝が整備され、さらに、1852年に斉彬がその水路を改修・延長して、集成館の水車に引き込んだことが分かっています。

集成館当時の取水口は大正時代に水害で決壊し、1913年に少し上流に新たな取水口が整備されました。

右上のイメージ写真のように、板などで川の流れをせき止め、水位を上昇させ、両側にある取水口から水を引き込むという仕組みです。

下の写真のとおり、兩岸とも集成館当時の取水口の痕跡は確認できませんが、旧取水口は石積みによって塞がれています。

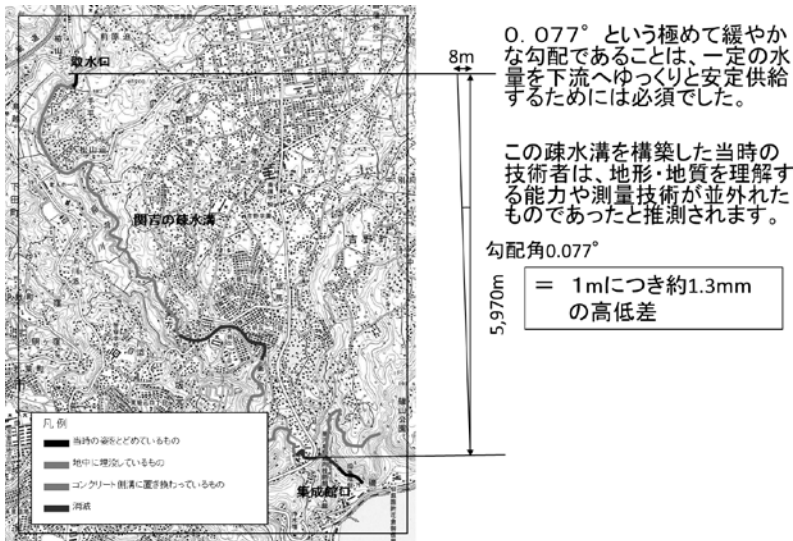
また、右下の写真からもわかりますように、江戸時代、硬い岩盤を加工するため、ノミを使いながら苦労した痕跡も残されています。



資料19 関吉の疎水溝（取水口）

ここで、「関吉の疎水溝」に見るハイレベルの土木技術について御紹介します。

全体で7kmにも及ぶ疎水溝は地層の境目を見極め、これに沿って掘り進めることで、ほぼ水平の驚くべき水路が構築されました。取水口から雀ヶ宮落としまでの距離は5,970mありますが、高低差はわずか8mで、勾配は0.077°です。わかりやすく言い換えますと、1mにつき約1.3mmと極めて緩やかです。これは、水をゆっくりと安定して供給するためには必須でした。この疎水溝を構築した当時の技術者は、地形や地質を理解する能力や測量技術が並外れたものであったと推測されます。



資料20 「関吉の疎水溝」に見るハイレベルの土木技術

## 5 理解増進・情報発信の取組

遺産を次世代に継承していくためには、多くの方々に遺産の価値や保全の必要性等について、子供から大人まで幅広く理解を深めていただく必要があると考えており、世界遺産登録の前から取り組んできた講演会の開催や児童用副読本の配布、パンフレットやポスター、DVDの作成

などの普及・啓発に取り組んできました。

また、遺産を観光素材などの地域資源として活用を図っていくため、観光部局等と連携し、県内外の多くの方々への県内資産の情報発信として、映像を活用した取組や県外でのプロモーション活動を実施してきているところです。

例えば、平成28年5月から7月にかけて、デジタルドキュメンテーション展を県歴史資料センター黎明館で開催しました。(写真21)これは、グーグルアース・ストリートビューや7面の大型ディスプレイを用いた迫力のあるパノラマ画像により、「明治日本の産業革命遺産」を紹介するものです。修学旅行等で来館した児童・生徒や県内外の来館者に楽しみながら世界遺産に関心を持っていただきました。その後、構成資産のある県で順次開催しているところです。



- 1 開催期間  
平成28年5月5日(木)～7月31日(日)  
(休館日を除く。)  
9:00～18:00
- 2 開催場所  
県歴史資料センター黎明館1階ロビー(無料スペース)
- 3 内容  
(1) 『明治日本の産業革命遺産』や海外の産業遺産の大型ディスプレイによる映像紹介  
(2) 世界文化遺産登録認定証(複製)やパンフレットの展示  
(3) 遺産の概要やストーリー等を紹介するDVDの上映

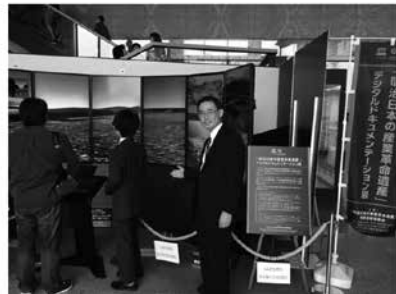


写真21 デジタルドキュメンテーション巡回展(世界遺産協議会事業)

そのほか、現在県で取組中の事業を紹介します。集成館事業に関連のある遺産は、鹿児島市内だけでなく、県下一円に分布しています。例えば、南九州市知覧町の厚地松山製鉄遺跡や、阿久根市脇本の寺島宗則の

旧家、いちき串木野市羽島の薩摩藩英国留学生出発の地、霧島市の山ヶ野金山、南大隅町の根占砲台、さらには、奄美大島の製糖工場など県下各地にあります。平成28年度から平成29年度にかけて、これらの遺産を調査し、ホームページ上で紹介して、県内外の観光客が資産巡りをしやすいようにモデルルートを組み立てられるような仕組みを検討中です。

## 6 終わりに 若手会の紹介

世界文化遺産登録を機に、次世代を担う若い方々にも関心を持っていただきたいと思います。ここでは「若手会」のことを紹介します。

「若手会」は、「明治日本の産業革命遺産」を次世代へ適切に保存し伝えていくとともに、地域活性化が図られるよう、地域住民やNPO、関係機関等が連携した協働の取組を進めるため、鹿児島市が2013年7月に発足した「かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議」に参加していた学生が中心となって、同年9月に発足した団体です。メンバーは、現在、鹿児島大学や鹿児島国際大学、志学館大学、鹿児島女子短期大学などの約30名の学生で、月に1回の構成資産周辺の清掃活動や、ボランティアガイドなど、鹿児島の産業遺産の素晴らしさを伝えるイベントの企画・運営に取り組まれています。フェイスブックで「若手会」を検索しますと、「かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議 若手会」のホームページにアクセスできますので、どうぞ御覧ください。学生のみなさんも、若手会に入って、いっしょに鹿児島の産業遺産の素晴らしさを多くの方々にアピールしてみませんか！！

最後に私の話を聞かれて、“世界の宝”を作り出した、ふるさと鹿児島の先人たちに思いを馳せながら、それぞれの遺産を訪ね歩き、その地域の魅力に浸ってみませんか。そして、みなさんと一緒に、鹿児島の世界文化遺産を大切に守り、活用し、県内外はもとより、世界中の人たちに発信していきましょう！

(鹿児島県企画部世界文化遺産総括監)

